

## 巖谷小波が朝鮮に「聞かせた」童話：朝鮮児童文学 と巖谷小波 その三

金，成妍

九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程二年

<https://doi.org/10.15017/8489>

---

出版情報：九大日文. 6, pp.14-31, 2005-06-01. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会  
バージョン：published  
権利関係：



# 巖谷小波が朝鮮に「聞かせた」 童話

——朝鮮児童文学と巖谷小波 その三——

金成妍

はじめに

お伽噺口演を始めた動機について、巖谷小波は次のように述べている。

然るに私がお伽噺の創作に著手した後、(二十七歳の頃であったと思ふ)……私が京都に旅行した時に、或小学校長から『是非私の学校に来てお伽噺をして下さい』といふ依頼を受けた。併し私はお伽噺を書く事は書いてをつたが、その時迄は未だ、一度もお伽噺の口演と云ふものをしたことがなかつたので、その事を話した処が『いや貴下のお伽噺は皆生徒が面白がつて読んでゐるのですから、それを实地に口演してくださるならば、猶を興味を感じることでせう。枉げて口演して貰ひたい』と云ふので、遂に——最初のお伽噺口演を試みた。(略)その後私は、大日本婦人教育会の依頼に応じて、家庭講演及びお伽噺口演

をやることとなつた。(略)お伽噺と云ふ新天地の開拓をして既に博文館の『少年世界』を主幹してゐたので、お伽噺の宣布(?)の為に、この好機会を喜んで捕へた。大日本婦人教育会の囑託を受けることになつた私は、毎月一回宛、学習院女学部及び幼稚園の生徒に、お伽噺の口演をすることになつたのである。これが東京に於ける——否、真平に公開の席上に於ける、お伽噺口演の第一歩であつたと云ふことが出来る！。

小波のお伽噺口演は、一八九六(明治二九)年、京都のある小学校長の勧めによつて始まつた。その後、口演童話を主とする地方巡講が始まつたのは、小波が四〇歳の頃であつた。地方巡講の動機については、「博文館では古くからの『少年世界』の外に『少女世界』『幼年世界』『幼年画報』などの諸雑誌を創刊したので、その宣伝の為に口演部が設けられ、久留島氏が入社して、専らその部を担当し、今なら活動写真といふところを、当時はまた幻燈をもつて各地を巡回してゐた。」と、小波は述べている。小波と久留島武彦は、一八九七(明治三〇)年頃から明治末頃まで、日本各地方からのお伽噺口演の要求にに応じて、いわゆる「口演旅行」を始めた。小波は自伝『我が五十年』に、「巡回した地方を云へば東北地方は仙台、山形、秋田、米沢、福島を中心にして信州を巡り、甲府、伊勢、名古屋、京都、大阪は申す迄もなく、江州を経て北陸地方は富山まで行つて、山陰道は鳥取、舞鶴、松江、山陽地方は岡山、広島、下ノ関に至

り、九州は福岡、熊本、宇佐（大分県）を巡回し、四国は高松及び土佐に入り、紀州から奈良を経て、北海道は旭川に行き、北越は新潟県全体を巡回し、東京附近は水戸、高崎、千葉、八王子、静岡、浜松と云ふやうに、所謂口演旅行を試みたのである。かう云ふやうに云ふと、如何にも私の足跡は日本の到る所に印せられた様である。否其後は朝鮮、満州、天津、北京又台湾の各地をも巡回したので愈々たいしたものゝやうに聞こえるのである。」と述べている。

小波と久留島武彦によつて一八九七（明治三〇）年頃から始まつたお伽噺口演は、大正に入つてからさらに活発になり、大きな都市には「お伽クラブ」が組織された。一九一八（大正七）年頃から「お伽噺」は「童話」と呼びかえられるようになり、口演童話は益々盛んになつた。また、各地に童話研究会ができて、全国の師範学校にもほとんど童話研究部が設けられて話す童話の研究を行ない、各地の児童文化団体主催の童話大会が日曜ごとに開かれた。<sup>4</sup>「童話界の三大家」と呼ばれる巖谷小波、久留島武彦、岸辺福雄の三人を中心とした口演は、明治末期から大正にかけて下位春吉らの「大塚童話会」、松美佐雄の「日本童話連盟」、芦谷重常の「日本童話協会」などの童話会創立に波及して、語りの専門家が続出するようになった。

小波は『童話の聞かせ方』において、一つのをいつても同じ話し方をしていて、それで聴衆がいつでも感動しているものなら完成したものといえるが、永久にそれを実現し得ないという意味で、口演童話は芸術的ではあるとしても芸術品とし

ては未完成だと述べる。かつ「口演するものは、聴衆を対照として初めて存在するものである以上、話の巧拙といふことも、つまりは聴衆への感銘如何によることである。理論よりも効果が大切である。」<sup>5</sup>ことを強調、「童話の目的とするところは、その内容なり主題なりの精神をうつすのが眼目である。」と述べる。

また、旧植民地における口演については、「台湾や朝鮮の新附の民が、生粋の内地人と同程度に、段々進みつゝあるのは事実である。やがて内地に於ける北海道や九州などゝ同じやうな気分で、話をして通じるやうな時代が来るであらうが、生憎風俗と習慣、即ち生活状態の異つて居る以上、やはり口演にも特別な用意が必要になるわけである。」<sup>6</sup>という考え方を示していた。小波は、「新附の小国民」と認識していた朝鮮の児童に対して、どういう口演童話を行なつたのだろうか。

本稿は、前回の『九大日文』五号（巖谷小波の「朝鮮巡回お伽講演会—朝鮮児童文学と巖谷小波 その二—」）において取り上げた「朝鮮巡回お伽講演会」を通して、小波が朝鮮側に「聞かせた」童話について論じていきたい。また、小波が朝鮮口演で選択した童話の素材、内容、改作程度、聞き手である対象に応じた話し方などを検証、童話の目的と「聞かせた」行為がもつ意味合いについて考察する。

## 用語の説明

歴史的・思想的コンテクストが曖昧になることを回避するために、原則として日本統治期の半島を表す表記に、朝鮮を使用することにした（一八九七年から一九一〇年までは大韓帝国を略して韓国と表記する）。

## 「全鮮巡回お伽講演会」に用いられた童話

一九二三年六月二日から七月一四日までの二〇日間、小波は朝鮮半島の二〇カ所を巡回し、六〇回のお伽口演会を開催した。そのなかで、今回の調査によって四二回のお伽口演の内容が明らかになった。以下、『京城日報』に基づいて調べた結果を、お伽口演の開催地域、語り所用時間、会場、語りの対象とその数、選択された童話の順に分けてまとめた。

### 六月二六日、京城

一時半〜二時、黄金館、小学校生徒、『水飴と鬼』／三時半〜四時、女子高普講堂、進明・淑明・朝鮮女学生、『猿蟹合戦後日物語』／七時〜八時、龍山鉄道学校、社会人・婦人、『桃太郎』

### 六月二七日、京城

午前八時半〜、第二高女講堂、龍山、元町、三阪小学四年生以上、一千五百名、『万太郎』／二〇分間、彰徳幼稚園、園

児・元町龍山小学一年生、『蜂の手柄』／一〇時半〜、第一高女講堂、女子技芸校・女子高普・進明・淑明女生徒、千名、『小猿橋』／一時半〜二時、京城劇場、鐘路・西大門・南大門小学校上級生、『深井慾之守』／三時半〜、京城劇場、公普男女生徒、『純太郎』／六時〜七時、龍山階行社、将校夫人・家族七百余名、『三郎鷲』

### 六月二八日、仁川

午前一〇時〜、公立普通学校、『何にも仙人』／一二時半〜四〇分間、寺町小学校、寺町の四年生以上、『指環大名』／三〇分間、日曜学校、幼稚園生、尋常一・二年生、『嘘吐き田吾作と正直太郎兵衛』、三時半〜四時四〇分、公会堂、婦人・女学生、『天狗の改心』

### 六月二九日、元山

午後八時半〜一〇時、公立小学校講堂、婦人・女学生、千余名、『鬼だまし』

### 六月三〇日、元山

正午〜、尋常高等小学校講堂、尋常高等小学校四年以下の児童、『太郎と次郎』／午後一時〜、同校五年以上・中学商業校生徒、二千余名、『正直者正吉』／元山第二公普、元山第一・第二公普四・五年以上、『褒美の人の形』

### 七月一日、咸興

午前八時〜一時間、咸興高普普通講堂、咸興師範・農業・商業学校・高普学生徒

### 七月二日、開城

一時〜、開城商業学校講堂、小学校・普通学校・主婦会、  
『鈍太郎』

**七月三日、平壤**

午前八時〜、公会堂、若松・山手小学校三年までの生徒、一  
千余名、『三郎鷲』／四年以上の生徒、一千余名、『水地獄』  
／一時〜正午、師範学校九〇名・普通学校三五〇名・農業  
学校六〇名、一千余名、『正直』／一時〜三時、高等女学校  
三〇〇名・高普女子三〇〇名・婦人一千名、『母の手本』

**七月四日、鎮南浦**

午前一〇時〜、小学校、女学校・小学校・普通学校女生徒・  
婦人、『褒美の人形』

**七月六日、安東**

午前一時〜、安東小学校、小学生・普通学校生徒、二千余  
名、『乙女と猿』

**七月八日、水原**

午前九時〜、公会堂、小学校・普通学校、『雨と飴』  
**大田**

一時半〜二時半、東本願寺、一般人、『猿と桃太郎』／中学  
校講堂、大田中学校・高女生徒・尋常小学校・普通学校、『鈍  
太郎と豚』

**七月九日、全州**

全州小学校、一千余名の男女児童・一般人、『太郎兵衛銀行』  
／普通学校、三年以上の男女児童・一般人、『何にも仙人』

**裡里**

裡里座、内鮮児童や父兄母姉、『褒美の人形』

**七月一日、大邱**

午後八時半〜九時、大邱座、中学生・一般人、『水地獄』

**七月二日、大邱**

午前八時半〜九時二〇分、大邱座、小学校生徒・一千余名、  
『正直正吉』／一〇時〜一〇時二〇分、活動常設館大正館、  
普通学校生徒七〇〇名、『極楽袋』／正午、大邱高等女校、  
同校生約四〇〇余名・愛国婦人会員、基督教会員一千余名、  
『小猿橋』

**七月三日、馬山**

馬山小学校、『水飴と鬼』『幸福のお城』／一二時〜、小学校、  
『天狗の改心』／二時〜、小学校、教務員・一般人／女学  
生、『地獄の笠』

**七月四日、釜山**

四〇分間、第三小学校、『指環大名』／約一時間、国際館、『水  
地獄』／午後四時〜、釜山高等女学校、釜山高等女学生六〇  
〇名・一般人、『石の花』『吝兵衛の改心』

『京城日報』の記述に基づいて、小波が朝鮮で話した童話を  
「勇気・機知物語」「動物物語」「動物愛護物語」「改心物語」「正  
直物語」「貯金奨励物語」「育児関連物語」の七種類に分類して  
みると、「勇気・機知物語」、「改心物語」、「正直物語」が各七  
回語られており、「動物物語」が二回、「動物愛護物語」五回、  
「貯金奨励物語」が三回となっている。また、口演の内容が把

握できなかったものに、『褒美の人形』『石の花』『地獄の笠』『幸福のお城』『母の手本』の話がある。

「勇気・機知物語」には、『水地獄』（三回）、『水飴と鬼』（三回）、『鬼だまし』（二回）が取り上げられた。まず、小波が平壤と大邱、釜山で話した『水地獄』は、以前、東宮、高松宮三殿下の前でも口演したことがある話である。一九一六年六月二五日の地久節（貞明皇后の誕生日）は、第二皇子淳宮（秩父宮）の誕生日に当るので、青山の皇子御殿では御祝が催された。その時、御所に招待された小波は、東宮、高松宮三殿下に御前口演をすることとなったのである。四つほどの話を用意した中から、伝育官と相談の上、『水地獄』と『指輪大名』が選び出された。『指輪大名』は筋に変化があつて面白いところから、そして『水地獄』は小さな弱いものが大きな強いものをやつつける壮快な話なので、闊達な殿下が気に入ると考えたからであつた。

『水地獄』は、一九一四年の欧州大戦の勃発当時に、ドイツと仏蘭西の国境で起つた話で、仏蘭西少年少女の勇気と智慧に関する物語である。ドイツとの国境近くにある仏蘭西北部のある村の酒屋の主人は召集されてしまい、そこには少年と少女とお婆さんだけが残っていた。二日も雪が降り続けたある寒い夜、三名のドイツ軍人が酒屋に乱入する。ドイツ軍人たちが酒屋に入つて乱酔しているうちに、仏蘭西少年は鍵で酒屋を閉め、少女と協力して警鐘を鳴らして村人を集める。少年少女は村人たちと力を合わせて、酒屋に水を注入し、ドイツ軍人を逮捕するという話である。この話について小波は、「初めは独乙

の原書から取つたものであつたが、欧州大戦後は、これを逆にして、独逸の斥候が仏蘭西へ侵入して、其所で捕虜になる事に改め、また満州辺でやつた時は、馬賊が日本の酒屋へ侵入して、其所の子供に捕らへれる事にかへて見た。此等は前にも云つたやうに、内容の主題さへ同じであれば、時と場合によつて、効果本位に改作する一例でもある。」と説明している。

七月一日午後八時、中学生及び一般人が集まつた大邸座に立つた小波は、「今晚は暑い晩であるから尤も寒い話を致しませう」という枕詞で『水地獄』の口演を始め、九時に閉会した。「童話の間かせ方」に「放送童話としての水地獄」が収録されているが、そこにも小波は、「大分暖かくなりました此頃に、又水の地獄と云ふ寒いお話をするのは甚だ御気の毒でありますけれども、暫らく御辛棒を願ひます。」<sup>10</sup>の枕詞を使っている。また、登場人物については、「都合に依つて日本風の名に致します。十五の男の子を太郎吉、十二の女の子をお花さん、お婆さんは、まあ矢張お婆さんとして置きます。」という具合に話を進めていく。六月末から七月初の暑い時期に朝鮮口演を行なつたことを考慮に入れると、『水地獄』のような「寒い話」は、都合のいい話材になつたと考えられる。『水地獄』の聞き手の年齢層は、平壤では一千余名の小学四年以上の生徒、大邸では中学生及び一般人を口演の対象としていたことから、高年齢（鬼）向けであつたと考えられる。「京城日報」は『水地獄』について、「仏蘭西少年少女の勇敢なる実話」、「仏蘭西少年少女の勇敢にして機智に富める物語」と紹介している。

それに対して『水飴と鬼』は、京城、水原、馬山の小学生を主な対象として語られた。『京城日報』(一九二三年六月二七日付)によると、六月二十六日、京城の黄金館で開かれたお伽口演会で小波は、「こゝにお出での方は皆人間の子で鬼は一匹も居らぬ筈です」「私は鬼を水飴で征伐したお話をしませう」と話を始めた。会場をギッシリ埋めたのは、日之出、桜井、東大門、附属小学校の生徒たちであった。七月八日水原で語られた話に対して、『京城日報』(一九二三年七月九日付)は『雨と飴』という題を付けているが、それは口演当日の天気が雨だったことによると思われる。「巖谷先生は萬雷の如き拍手に迎へられて登壇先づ雨に因みて水飴にて鬼征伐をなせし話をして満場の児童を笑はせ大喝采を博し降壇」という記事から、語られた話が『水飴と鬼』だったことが分かる。

『水飴と鬼』は、鬼退治の話で、金太と花子の兄妹が登場する。二人はお母さんから水飴をもらって野に遊びに行く。花子は行方不明となつてしまい、金太は道を迷つて赤鬼の家に飛込んでしまう。そこで金太は花子と再会し、逃げ出そうとするが赤鬼が邪魔するので、水飴で鬼の眼をつぶし、隣家から赤鬼の応援に來た青鬼を欺いて赤鬼と喧嘩させ、その隙に二人は逃げ出し、家に帰つたという話である。「智と力を暗示した講演」として『京城日報』は報じている。

小波は朝鮮口演において、動植物を擬人化させた寓意的な話として『猿蟹合戦後日物語』と『蜂手柄』を取り上げている。

『童話の語り発達史』に収録されている、登場人物に関する調

査統計を参照すると、谷出千代子は、口演童話として語られた作品を『実演幼児童話集』『新選学校童話集』『話方研究』から分類して、その傾向を分析している<sup>11)</sup>。対象となつた一四三編の作品のなかで、登場人物に人間のみが登場するものは、幼児・低学年向けが二九編(三三・〇%)、中学年一四編(四五・二%)、高学年一七編(七〇・八%)で、動植物のみが登場するものは、幼児・低学年一九編(二二・六%)、中学年五編(六・一%)、高学年一編(四・二%)、人間と動植物、その他が共存しているものは、幼児・低学年四〇編(四五・五%)、中学年一二編(三・八・七%)、高学年六編(二五・〇%)となつている。この統計は、低学年には動植物を擬人化させた登場人物が割合を占め、高学年に進むほど直接人間が登場させている傾向を表している。

小波の朝鮮口演の場合、『猿蟹合戦後日物語』は高等女学生という高年齢児を対象としており、『蜂手柄』は幼稚園生及び小学一年生の低年齢児に語られていた。小波は一八九一(明治二四)年二月、『幼年世界』に『猿蟹後日譚』を発表したが、口演の記録がないため、朝鮮口演で話した内容と一致するかは確認できない。朝鮮口演では、女子高普、進明、淑明女子校及び附属女子公普の上級生が『猿蟹合戦後日物語』の聞き手であった。『京城日報』(一九二三年六月二七日付)による記事は次の通りである。

『猿蟹合戦後日物語』の話をなし満堂の朝鮮女学生の臍を擦らせたが先生の童話は教科書で馴染深いのみならず

教外読物として彼女達に愛読されてゐるので其作者の温容に親しく接して一場の講演を聞く機会を得た事を非常に感謝してゐた。

『蜂手柄』は、六月二十七日、京城の新龍山彰徳幼稚園で、園児及び元町、龍山小学校一年生に二〇分間にわたつて語られた。小波は、長いのは却つて倦怠を招く恐れがあるから幼稚園及び低学年の児童に対しては、二〇分間を限度とするのを「私の主義」としていた。『蜂手柄』は、鳥と獣が小さな事から大合戦をはじめ、獣の軍は狐の振るしつぽの動き方によつて規律を整えて優勢だったが、鳥の軍に味方した蜂に刺されびつくりした狐がしつぽを下げたので、獣の軍は指軍を誤解して大敗、それ以来狐はしつぽを下げるようになり、蜂は鳥から花をお礼にもらうようになったという話である。

「動物愛護物語」としては、『指輪大名』と『小猿橋』が語られた。六月二十八日と七月一日、仁川と釜山で二回口演した『指輪大名』は、前述したように、『水地獄』とともに以前、東宮、高松宮三殿下の前でも口演したことがある話である。狩好きの大名がある日狩場で小人を助け、そのお礼に何でも願い事が叶う不思議な指輪を一つもらうが、その代わりとして毎日のようにしていた狩を週一度に減らす約束をした。しかしその約束を破つて三日間狩をした結果指輪を紛失、隣国からの攻撃まで受け、大名の親子三名は敵方の虜となつて山奥の洞窟に監禁される。牢番の老爺と親しくなつて時々外に遊びに出しても

らつた息子は、木の下に落ちてゐる子鳥をかわいそうに思つて拾つてきたが、大名夫婦が親鳥の所に返して来いといふので鳥を巢に返したところ、無くした指輪が戻り、大名は国を取り戻して、狩もせず幸せに過ごしたといふ話である。

『童話の聞かせ方』に収録されている「口演としての指輪大名」の冒頭は、「小太郎と云つて、或る立派なお大名の若様がありました。」と始まつている。小波によると、原書は王様だつたのを日本風に改作して大名にしたといふ。また、「この話のもつ寓意は、総じて上に立たれるお方は、仁慈の心が大切であるといふ事で、動物愛護を高調し、筋にも変化があつて面白い」<sup>12</sup>と述べている。仁川では、四年以上の小学校生徒が、釜山では草梁小学校生徒たちが小波の『指輪大名』を聴取した。小波の『指輪大名』口演について、『京城日報』（一九二三年六月二十九日付）は、「之は十年前に来鮮した際京城に於て講演したもので滑稽味の中に動物愛護と約束の尊重すべき事を小さき芽生えの印象に吹き込み大喝采裡に四十分の興味ある講演を終つた」と報じている。

『小猿橋』は三回にわたつて語られた。その一回目は、『京城日報』（一九二三年七月七日付）によつて、『乙女と猿』という題がつけられている。『小猿橋』は、花子といふ心のやさしい少女が、父が拾つてきた猿を自分の弟妹のように愛していたが花子の身に危険が迫つた時、猿が飛び出してきて花子の身代わりになり恩人の命を助けるといふ話である。六月二十七日午前一〇時半、第一高女講堂において小波は、「今から皆さんに聞かせ



る話は嘘の事です、然しその嘘の中に真実が籠つてゐますから、その真実をよく味つて下さい」<sup>13</sup>と前置した後、『小猿橋』の口演を始めた。朝鮮における小波のお伽口演会には、大体一回あたり五百名から一千余名の人が平均的に集まつたとみられるが、『小猿橋』は、特に聴衆が多い時によく選ばれている。京城では、女高生徒が一千余名、安東口演では、小学校、普通学校生徒約二千余名、大邱では大邱高女校生徒四百余名に愛国婦人会及び基督教会員が一千余名集まつていた。『京城日報』は、一九二三年六月二八日付において、「動物愛護を寓した童話に少女達を泣かせたり笑はせたりしてお伽王国の樂園に千余の魂を集めた」と報道、七月七日付には、『乙女と猿』の美はしき譚をして児童に動物愛護の深き人生を刻み附けた」という記事を出している。

「改心物語」に分類したものには、『鈍太郎』(二回)、『鈍太郎と豚』、『深井慾之守』、『極楽袋』、『太郎と次郎(筆者による仮題―筆者注)』、『各兵衛の改心』のような話がある。『鈍太郎』と『鈍太郎と豚』は同じ話である。『少年世界』(博文館、一九一四年)と『小波お伽全集九』(千里閣、一九三〇年)に掲載されたものを参考にすると、『鈍太郎』は、父親が怠け者の鈍太郎に豚の番をさせて出掛けたところ、鈍太郎は豚を羨ましく思いながら豚小屋の中で豚と一緒に寝てしまう。目を開けてみると、豚がいなくなり、鈍太郎は道を歩いていた老人を疑うが、老人は鈍太郎を豚に変えてしまう。豚になった鈍太郎は屠殺場につられ、殺されそうになるがその瞬間夢から覚める。話は、「流

石の鈍太郎も、この夢ユメがよくよく恐かつたと見えて、後にわもう用のある時にわ、決して寝なくなつたと云う。」と終わつている。朝鮮口演における小波の『鈍太郎』話について、『京城日報』(一九二三年六月二八日付)は次のように報じている。

鈍太郎といふ怠け者が遊んで喰へる豚の生活を羨み豚になりたいと希つて居ると或る日豚になり人に買はれて屠殺場で殺されんとした夢を見て慄き父からも豚は人の食用になるため牛馬の如く労役せず遊び飼ひにされる事を懇々諭され翻然悔悟して勤勉家になると云ふ講演で怠慢を戒め小さい鮮人の聴衆の拍手を浴びた。

『深井慾之守』は、欲張り殿様が不思議な童子によつて改心され、情の守となる話で、『極楽袋』は、『深井慾之守』を改作したもので筋は同様である。『太郎と次郎』は、小さな事から始まつた喧嘩で、大格闘をする事になった太郎と次郎の兄弟が、忠犬と雪の女神によつて仲直りする話である。『各兵衛の改心』については、『京城日報』(一九三三年七月一六日付)に、「教育的な一場」と報じられている外、内容に関する記録はない。

「改心物語」の聞き手をみると、『鈍太郎』は、小学校生徒から普通学校、尋常小学校、中学校、公普の男女生徒が聞き手となり、『深井慾之守』は、小学校上級生、そして『極楽袋』は普通学校生徒七百余名を前に語られた。『太郎と次郎』も小学校四年生以下の児童に語られていて、「改心物語」は、全体的

に小学生向けに用いられたとみられる。

「正直者物語」には、『天狗の改心』(二回)、『万太郎』、『正直正吉』、『正直者の正吉』、『正直』、『嘘吐き田吾作と正直太郎兵衛』がある。六月二八日、仁川公会堂で開催された「婦人講演会」は、「定刻前より知名士の夫人令嬢を初め時代に目覚めた婦人や女学生等続々と入場し忽ち仁川婦人界未曾有の大盛況を呈した」という。小波は、「罪な嘘と教訓の方便として話すための真理ある嘘の差異」について講演した後、『天狗の改心』を口演した。『京城日報』による『天狗の改心』の内容は、妹思いの太郎吉が巨人山の天狗のために無実の罪で死刑となるところを、わがままだった妹が兄のために命を捨てようとしたので、天狗も心を動かされ、太郎吉を助けて迂闊な裁判をした役人にいたずらを演じるという話で、小波は七月一四日、馬山小学校でも同じ話を口演した。『天狗の改心』口演について『京城日報』(一九二三年六月二九日付)は、「家庭教育上の暗示を刻み込まれた」話だったと報じているが、それは、口演が婦人や女子学生を対象に行なわれたことによると考えられる。

『万太郎』は、お母さんと一人暮しの万太郎という心の正しい少年の話である。万太郎が住み慣れた家を引っ越す事となり、不幸にしているところ、白髪の老人が現れいるんな用事をいつつけ万太郎を試すが、万太郎がいかなる無理難題にも約束した事は必ず守るので感心した老人は、亡き父が家宝を地下に隠しておいたことを教え、また数年前悪者によって人形となった妹花子を人間に戻して家に帰したという話である。この話は、

六月二七日、京城の第二高女講堂で小学生一千五百余名に語られた。また、六月三〇日午後一時からは、元山の桜カ丘尋常高等小学校五年生以上及び中学商業校生徒の約二千余名に、正直者の正吉を恵比屋の主人が本当の正直か偽正直かを試験するという「正直者物語」が口演された。そして『正直正吉』は、七月一二日大邱座において午前八時半から九時二〇分まで語られた話である。『京城日報』(一九二三年七月一四日付)によると、一千余名の小学校生徒が集まった大邱座の壇上に現れた小波は、「皆様お早うございます」と挨拶し、学生達を喜ばせた後、話を始めたという。また話の内容については、「徹頭徹尾正直なる正吉徹頭徹尾正直でない曲松との交渉を最も面白く可笑しく説き去り説き来りて好悪なる曲松の策略が自然に破壊され遂に悪人の破滅、正直正吉の大成功を語り」と伝えている。

仁川の東本願寺の日曜学校で語られた『嘘吐き田吾作と正直太郎兵衛』は、六月二九日付の『京城日報』の記事によると次のような内容である。田吾作銀行を作ってお金持ちとなつたうそつき田吾作の所に、お金を借りに来た正直太郎が、目玉とひき替えにして田吾作から五十円を借りて商売を始める。だが、余りに正直な正直太郎は金儲けができず、ついに両の目玉を田吾作にとられて散々ひどい目に会うが、ある夜情け深い小人に助けられ田吾作にお金を返した。一方、うそつき田吾作は欲張り過ぎたために鬼に喰われて死んでしまい、田吾作の代りに正直太郎兵衛が銀行の頭になる。小波は、この話を幼稚園から尋常一、二年生までの低学年の児童に向けて、三〇分間口演した。

「嘘吐き田吾作」と「正直太郎」という、不正直者と正直者を真つ向から対立させた単純明快な筋のこの話は、勧善懲悪の教訓が添えられているのは言うまでもなく、金儲けの手段として「銀行」を用いたところに注目すべきである。なぜなら、この話が低学年齢児に向かつて「銀行」の意味を分かりやすく説明したものと考えられるからである。話の結末も、「お金持ちになりました」の代りに、「銀行の頭になりました」となっている。低学年の児童には、二〇分間限度の口演を「主義」にしていた小波は、一〇分延長して、「銀行」を通してお金持ちとなる話を聞かせていたのである。『京城日報』は、「一條の軽妙なお噺の裡に無限の教訓を与へて約卅分の後割るる許りの拍手にお話が済む」と報道している。この話を通して小波が与えようとした「無限の教訓」とは、「貯金奨励物語」によつても語られていた。

「貯金奨励物語」の口演は、三回行なわれた。『京城日報』の記事を引用して、その口演の内容と報道ぶりをみると、まず、六月二八日午前一〇時から開かれた仁川公立普通学校の口演会については、次のように報じている。

先生は万雷の如き拍手に迎へられて登壇例の親しみのある口調で、懶者の太郎が懶神の居候に舞込まれと変る場所もなく居るのを隣の田吾作と云ふ勤勉者から工場で働く事を教へられて工場で働く中に労働の愉快とお金が取れる味を覚えてあぐせくと働く儲かつたお金

を貯金してゐたが其の内に懶神が段々瘦せて遂に消へ失せ其の代りに懶神が這入つて来た壺の中から金貨銀貨がザクザク出て祐福になつたと云ふ貯金奨励の話をして鮮童に多大の感動を与へ降壇した。

話の題名は記されていないが、話の筋から『何にも仙人』であることが即座に判明する。また、『京城日報』七月一日付には、「普通学校に到り三年以上の男女児童及一般の爲めに勤勉と貯金を奨励せる『何にも仙人』の噺をして大喝采を博したるが聴衆中には亥角知事出崎警察部長、朴參與官等の顔も見えた」という記事が載せられている。朝鮮における小波の『何にも仙人』は、「勤勉と貯金を奨励せるもの」として語られていたのである。

もともと『何にも仙人』は、世界お伽文庫のなかの『なんにも』という、トランスルバニアのお伽噺を原典としているものである<sup>15</sup>。小波はそれに日本の『物臭太郎』を枕として改作した。

太助という怠け者が、道ばたの壺に入つていた何にも仙人を自分の家にとめてやる。しかし、太助が遊んでいるうちに、だんだん大きくなつてきた何にも仙人のために家に入れなくなつた。太助が軒下にたたずんでいるところに、やつてきた隣のおやじさんが、新田の稲かり場につれて行き、稲かりを手伝わせた後五〇銭をくれる。太助が楽しく働くうちにだんだん小さくなつた何にも仙人は、初めに入つていた壺のなかにもどり、

小判になる。話は、「太助は、これからいよいよ仕事にはげんで、大金もちになりましたというお話……」で終わる。

この話が朝鮮口演において、「隣のおやじさん」の代りに「隣の田吾作と云ふ勤勉者」、「新田の稲かり場」の代りに「工場」が登場、働いたお金は「貯金」をするというふうに変更された。小波は、出崎知事、警察部長、朴参与官などが参席したお伽口演会で、「勤勉と貯金」を奨励する話としてこの『何にも仙人』の口演に努めていたのである。

前にもふれたように、小波は口演童話について、「理論よりも効果が大切」、「内容の主題さへ同じであれば、時と場合によつて、効果本位に改作する」という考え方を示していた。『何にも仙人』の改作によつて期待された効果が、「勤勉と貯金の向上」にあったのは言うまでもない。

小波は口演童話を通して、「正直」「動物愛護」「貯金」「労働」「勤勉」に関する話を朝鮮側の人々に聞かせていた。日韓併合の後、寺内総督は、朝鮮は地理的・人種的・文化的に日本に近く、日本の統治は欧米の植民地支配とは異なるという「同化論」を述べ、朝鮮人を「忠良なる帝国臣民」にすることが統治の急務であることを強調した。そして、朝鮮人を「忠良なる帝国臣民」に改造するために、最も強調されたものが教育政策であった。一九一七年、朝鮮総督府学務局が教科書編纂にあたり発行した概要では、教科書一般方針として、「朝鮮は内地台湾等と同様我が国家の一部をなすものなることを（朝鮮人に）明に知らしむることが掲げられている。また修身においては、

「一視同仁」の天皇の恩恵を強調すると同時に、「正直・勤勉・儉約・貯蓄・清潔・衛生等」が重視された<sup>16</sup>。よつて、朝鮮において小波が口演した童話の内容は、朝鮮に対する日本の教育政策に即していたと考えられる。

三・一独立運動の勃発以降、日本は天皇の「一視同仁」のもとでこそ幸せであることを宣言、「文化政治」を掲げた「内鮮融和」政策を展開した。しかしそれ以後も、朝鮮における反日的な社会運動は引き続き繰り返されていた。それに対して、小波は次のように述べていた。

今更独立運動だの、民族自覚だの云ふ事も、何だかちと脱線気味だが、どうせ赤い色眼鏡が流行れば、其位の錯覚は大目で見えて置くとして、兎角は日韓融和の為めには、此方からも盛んに出かけ、彼方からもどしどし迎へて、双方の意志の疎通を謀るが捷徑だ。<sup>17</sup>

また、「朝鮮は日本とは太古からの関係が深い。所謂る八百万の神々の中には彼地から渡らせられた方々もある様だし、また新羅時代からの国王の中には、日本から乗込んだ豪傑もあつた。」<sup>18</sup>という、「同祖論」に至る発言も述べていた。このような発言は、小波の思想が、朝鮮が日本であるという日本の朝鮮統治を疑いもなく受け入れていたことを窺わせる。

「一視同仁」に基づいた「内鮮融和」政策を展開するにおいて、朝鮮側に深まっていた日本に対する反感や不信感は、解

決してなければならない日本側の政治的課題であった。そこで小波は、他民族にも浸透しやすく馴染みやすい、お伽噺を聞かせる行為を通して朝鮮の人々の前に立った。言い換えれば、日本側は、他民族に浸透しやすく馴染みやすいお伽噺の第一人者であった小波を朝鮮側に立たせたと考えられる。

小波が朝鮮口演に選んだ話材には、「約束を守る」と「信じる」との大切さを涵養する話が一番多かった。相手を信じることによって幸せになる話を繰り返して話している。また、「勤勉と労働」も重要な話材となった。朝鮮の人々に、工場に出かけることを呼びかけ、労働がいかに楽しいことを語り回った。低学年児には、お金持ちになる手段として「銀行」の意味を語る一方、工場で働いて稼いだお金は銀行に貯金するように奨励した。朝鮮における小波の口演童話の世界には、「稲かり田」の代りに「工場」があり、「隣のおやじさん」の代りに「工場で働く勤勉者」がいる。口演童話において「効果本位」を志向した小波は、国是に沿う教育方針を投影させた改作を試みたのである。

それに加えて、もう一つ見逃せないことがある。小波が、女子高生と婦人を対象とした「婦人講演会」及び「お伽講演会」を多く開催したことである。今回把握した四二回の口演会のなかで、女子高生と婦人を対象としたお伽口演は一回行なわれていた。口演の地域別開催数は、京城四回、仁川一回、元山一回、平壤一回、鎮南浦一回、大邱一回、馬山一回、釜山一回である。口演の内容は、日本昔話の口演が七回（『桃太郎』『カチカ

チ山』『猿蟹合戦後日物語』『小猿橋』（二回）『天狗の改心』『鬼たまし』）、実例をとりあげた育児教育法に関する口演が二回（『母の手本』『伊藤博文の幼年逸話』『自分の継母』）、その他（『石の花』『三郎鷲』『地獄の笠』『褒美の人形』『客兵衛の改心』）であった。

女子高生及び婦人に対して、小波は主に日本の昔話を話した。なかでも、『桃太郎』と『カチカチ山』をとりあげた口演に注目したい。六月二六日、社会人及び婦人を対象に龍山鉄道学校で開かれた口演会において、小波は「日本の国民性を表徴したる『桃太郎』の昔噺の持つ寓意を通俗的に面白く解剖して童話が如何に児童を支配するか又其選択が如何に大切なるか」<sup>19</sup>について述べた。翌七日に開かれた将校夫人及びその家族七百余名が出席した口演でも、「童話が如何に児童を支配するか又其選択が如何に大切なるか」を引きつづき強調した。しかし、『桃太郎』を例とした前日に対して、この日は、『カチカチ山』を取り上げ「童話が子供の心を支配する力の大なるを利用して之を教育に結びつけるのはよいが、苦い良薬も服用せねば効能なき」ことを指摘、『カチカチ山』の内容が非芸術的にして現代に適せざるのみか却つて児童を誤る虞れがある」<sup>20</sup>ことを述べた。

小波は『桃太郎主義の教育』においても、『桃太郎』と『カチカチ山』を取り上げて次のように述べていた。

抑も桃太郎なるお伽噺は、その初めから終まで、積極的に、進取的に、放胆的に、而も亦楽天的である。之に比

べると、他のカチカチ山と云ひ、花咲爺と云ひ、猿蟹と云ひ、舌切雀と云ひ、等しく「ポビユラー」な噺でありながら、何れも消極的な、姑息な、小心な、極めて月並な教訓たるに過ぎない。見たまへ、カチカチ山の如き、婆を喰つた悪狸が、兎によつて亡ぼされるのだ。立派な懲悪には相違無いが、今日の文明思想から考へると、頗る残忍なものである。<sup>21</sup>

確かに『カチカチ山』は、お婆さんを食べた悪いたぬきが兎に滅ぼされる話で、悪をこらしめる話であることには違いない。しかし、小波は、考え方によつてはあまりにも残忍な内容だし、『花咲爺』の勸善懲悪も仏教や儒教からきた姑息な教戒に過ぎないと述べる。また『舌切雀』については、遠慮深い爺さんをほめて欲の深い婆さんを罰しているが、こういう話は「それだからこうしろ」という進める方の話でなくて、「それだからそんな事はするな」という押さえる方の話だと述べ、「あれよ主義ではなく、なかれ主義である」と説く。これらの話に比べて『桃太郎』については、次のように「理想のお伽噺」として位置づけている。

世界中のお伽噺の中には、桃太郎よりも面白なお伽噺は、箕で量るほどあるに相違無い。が、それにしても、富士山が日本一として、理想的の山容を備へて居る如く、桃太郎も亦日本一として、理想のお伽噺たるを失はない。

小波は、教訓の訓の字は教えるの意味で、「こうしなさい、ああしなさい」と人を導く積極的な意味があると説明する。しかし従来のお伽話の中には、「こうしてはならぬ、ああしてはいけない」という消極的なものが多いと指摘、それはみんな戒める意味で、教訓というよりは教戒であると述べる。訓の方は「滋養剤」で、戒の方は「治療剤」と、葉に例えても説明している。すなわち、「滋養剤」は健康を増進し、「治療剤」は病気を鎮静する。子供には治療的教戒より滋養的教訓の方が必要である。そういう意味で最も滋養の大なるものが『桃太郎』だと論じている。

小波の童話観、児童観、教育観が最も明確に表われている『桃太郎主義の教育』は、一九一五年二月に発刊された。当時の日本は、日清戦争、日露戦争を戦い抜いて、一九一四年からの第一次世界大戦にさしかかっていた。このような状況の中、小波は、「感ずるところあつて、敢へて桃太郎を論じてみる」という冒頭で始まる『桃太郎主義の教育』を出版した。同書において小波は、

翻つて我国を見れば、僅々五十年、半世紀の間に、随分大きな進歩をしたものだ。まづ王政の復古から、海外諸国との交際、憲政の実施、條約の改正、日清、日露の戦役から、遂に今度の日独開戦に及んで、所謂世界の一等国たる估券は、いよいよ確実に裏書されるに至つた。<sup>22</sup>

と述べ、「今その大切な時に当つて、よく我国を導き得るものは誰か？我が桃太郎君を置いて、又他に誰かあらうと。」と「日本将来の国民教育は、正に桃太郎主義ならざる可からずだ。」と主張する。

小波の考え方は、最後の項である「頑固な鬼を退治せよ」において、さらに明らかになる。

我が日本の将来は、より大に、より強くあらねばならぬ。それにはその国民を造るべき、教育の方針を根本的に改革して、将来の姑息な注入主義を斥け、専ら放胆な開発主義を執り度い。頭に斗り血をのぼせて、腹に力の無い様な人間、精神のみ勝つて実力の之に伴はない国民は、断じて造り度くないと云ふ事である。元より所謂る過渡の時代には、その潮流の変調に巻かれて、多少の犠牲者は止むを得ない事だ。然るにその犠牲の一人を恐れて、他の百人の進捗を阻む様な、意気地の無い了簡で、何うしてこの新日本を、前途の太平洋に導かれ得やう。今は大切な時である。日本が果たして世界の日本になるか、単に東洋の日本に止まるか、また日本の日本に退くか、或は又事によつては、殆ど世界に認められないまでの、一小島になり下つてしまふかは、一に国民の覚悟如何にある。<sup>23</sup>

強い国家主義を背景に、「桃太郎主義」による「国民」を育て、世界の「新日本」を造ることを強調している。そして書き出しと同様の、「感ずる所あつて、桃太郎論を書いて見た。」という文章を最後にしている。

小波にとつて『桃太郎』は、積極的で、進取的で、放胆で、楽天的で、健康だという理由で、最も理想的な話であつた。このような『桃太郎』から生じる「桃太郎主義」を、朝鮮の口演にも持ち込んでいたのである。

小波は女子高生と婦人を対象に、实例を挙げた口演も行なつていた。六月二九日の元山口演会においては、自分の幼年時の話や「継母の事」を实例に、「来聴の婦人に育児上の注意」を与えた。『京城日報』（一九三三年七月三日付）は、「千余の婦人や女学生達は土砂降を接して続々来集し元山開港以来未曾有の大盛況を呈した」と報道している。「継母の事」については、小波の自伝に次のような逸話が収められている。

生母が生後四ヶ月後に病死した後、小波は里子に出される。五歳の時実家に戻されると、実家には一年前から継母、茂登が入つていた。小波は彼女を本当の母と思ひ、だだをこねて、ずいぶん世話を焼かせたという。一四歳のある日、うたた寝をするうちに傍で乳母と女中が話すのを聞いて小波は初めて本当の母でないことに気が付く。そして、今まで実の母同然に接し、育ててくれた継母に感謝し、これまでのわがままを恥ずかしく思う。それからと言うもの、小波は人が変つたように素直になリ、継母の方もそういう小波の様子を一層いとおしく思うよう

になつたという話である<sup>24</sup>。

実例をあげた育児法に関する口演は、七月三日平壤でも行なわれた。高等女学校の生徒三百名、高普女学校生徒六百名、そして婦人が千余名集まつたこの口演においては、伊藤博文の幼年時の逸話が語られた。『京城日報』(一九三三年七月四日付)は、「公を大成せしめた母親の教育法を説き満場を酔はしめ婦の涙人を唆つた」と報道している。

伊藤博文は、天保二二年九月二日、周防国熊毛郡にある東荷村で生まれた。父林信吉は、正直者との評判はあつたが切れ者ではなく、家の生活はいつも貧乏であつた。母のお琴は、「それは又不思議と、負じ魂の男優りで、よく、良人を扶け、朝から晩まで、真黒になつて稼ぎ通すといつた、気丈な女性」<sup>25</sup>であつた。お琴は、夫の信吉に武家奉公で身を立ててもらいたいという思いから、無理に進めて信吉を萩の城下に移らせた。家主が留守になつてからは、お琴は男になつた覚悟で、幼い伊藤博文を育てながら必死に働いた。伊藤博文は、成長するに従つて悪戯が激しくなり、時には子どもらしくない悪戯に、若い男ですら苦しめられることもあつた。同じ年頃の子どもはいつも伊藤博文にいじめられて、その苦情を母に言いつけた。このようなことが、日に幾度あつたかしのきもあつた。そのため、母のお琴は心を痛めていた。そんなある日、お琴は寺子屋から帰ってきた伊藤博文の前に座らせ、今は百姓をしているが、先祖は武家であることを詳しく話して聞かせた。また、父も息子を武士にしたいという思いで、今、萩の城下で苦勞している

ことを話した。伊藤博文は、自分が武士の末裔と聞いて武士になりたいと思ひ、父がそのために萩に居るといふことを聞くや、翌日、一人で萩の父の所まで訪ねて行つた。子どもながらも伊藤博文の覚悟に感動した父信吉は、我が子を村に帰さず、文武の二道を仕込んでみたいと思つた。妻にもその思いを伝えると、お琴も承知の旨を伝え、それから伊藤博文は、父のもとで勉強に励むようになった<sup>26</sup>。

このような二つの逸話には、小波と伊藤博文の二人ともが腕白で悪戯な性格であつたといふ共通点が認められる。また、母親との関係、先祖のことを聞かされたことが、その後の人生観を変える転機となつたことも共通している。

小波は『桃太郎主義の教育』において、自分が理想とする桃太郎について次のように述べ、豊臣太閤や徳川家光など、幼年頃に乱暴な腕白者であつた偉人の逸話を次々ととりあげている。

更に僕は想像する。彼の桃太郎なるものは、随分腕白な暴者であつたらう。時には爺さんにも小言を云はせ、婆さんにも眉を寄せさせた事があるに相違無い。そこで此暴れ者、亦必しも憎む可らず、寧ろ大いに愛すべしだ<sup>27</sup>。

小波の「桃太郎主義」に基づいて述べると、子供は年を重ねれば生育し、ついには大人になる。大人になつてから始めて社会に役立てば、それで人間としての能事は足りる。子供の時代



から、一人前の人間らしく立ち振る舞わせる必要はない。それよりも子供の時は子供らしく、子供としての純真さを遺憾なく発揮させるところに、他日の大成が期させるのである。

ところで、一九二三年という時点の朝鮮において、朝鮮人の女子高生や一般人も参加した口演席で、伊藤博文を「偉人」としてとりあげているのは意外と言わざるを得ない。『日本による朝鮮支配の四〇年』における姜在彦の言葉を借りると、伊藤博文は日本では歴史的に高い評価を受けているが、朝鮮人にとっては不倶戴天の敵であり、日本の侵略の元凶だという認識があるからである<sup>28</sup>。もし伊藤博文を「偉人」としてとりあげた口演が、「満場を酔はしめ婦の涙人を唆つた」程好評を博したということが事実ならば、通説としてある伊藤博文を侵略の元凶とする見方が、当時の朝鮮に存在したといえるのだろうか。現時点では、推測の域を出ないが、伊藤博文を元凶とする見方は、一九四五年以後に作られた概念でしかないのかもしれない。しかし、それを語るには、資料の不足を否めない。これに関しては今後の課題としたい。ただ、ここで重要なことは、伊藤博文の逸話を話すことで、小波が内鮮の女子高生及び一般の婦人たちに何を伝えようとしたのかという問題である。この口演を通して、母の身なる女性に対して「親の役目」や桃太郎主義に立脚した小波の教育観が訴えられたのではないだろうか。

小波は、桃太郎とともに『桃太郎』に登場する爺さんと婆さんを理想的な親像として解釈していた。まず、小波は、『桃

太郎』の爺さんと婆さんが、あの年をして毎日働いているところに注目する。それも草鞋を作るとか、芋を掘るとかの老人相應の仕事ではない、柴刈りだの洗濯だのと、比較的力の要する仕事を少しも厭わずやっていたところを「労働神聖主義」と評価する。そこで小波は、朝鮮を訪問した際に目の前にした光景について次のように語る。

僕は去年朝鮮へ行つて見て、不図目に付いた事がある。それは彼地の鮮人の多くが、今も丁度この二人「桃太郎」の爺さんと婆さんのこと――筆者注 の様に、男はチギを負つて山へ柴刈りにゆき、女は砧を打つて川で洗濯して居る事だ。一体朝鮮の家には、皆オンドルと云ふものがあるから、随つて之に焚く柴が要る。また白い衣服を著るから、何うしても洗濯が忙しい。この二つの点からして、彼地では今も尚、桃太郎の爺さん婆さんを、実際見ることが出来るのが面白い<sup>29</sup>。

また、爺さんと婆さんが、川上から流れてきた大きな桃をすぐに拾い上げたり、桃から子供が飛び出しても逃げ出すことなく大喜びで育てたりする「無造作」のところに「価値」を置く。そして、全体家族主義の日本の社会では、どの家でも子供を欲しがすが、その理由は後継というところもあれば、早く自分が子供に養われたいという思いもあると指摘、そのような卑怯な思いをもたない爺さんと婆さんについて、次のように述べ

る。

其鬼ヶ島征伐にも、何等の躊躇無く許して居る。若しこれが桃太郎に、はやく成人してもらつて、代りに山で柴を刈つてもらひ、自分は自家で炬燵にでもあたらうと云ふ、卑劣な考へであるならば、鬼ヶ島征伐など云ふ、恐ろしい冒険事業を聞いて、決して之を許すものではない。これを畜に許してやつた斗りか、更にその兵糧までも、自分達の手で拵へてやらうと云ふのだから、その元氣や、実に壯者たらしめる<sup>30</sup>。

小波は『桃太郎主義の教育』の最後において、「我が日本に親たる者は、桃太郎の爺さん婆さんの如くなれ！人の子たるものは、桃太郎其人の如くなれ！而して人の臣たるものは、正に犬、猿、雉子の如くあれ！」と主張する。

『桃太郎』に登場する爺さんと婆さんに、小波の教育観が読みとれる。すなわち、爺さんと婆さんはやつと授かつた子供が鬼ヶ島征伐に行くとき、何の反対もせず黍団子を持たせて快く送り出す。一方、伊藤博文の母親も、武家奉公に身を立てさせるために夫を萩の城下に移させた上、伊藤博文を自覚させ、父の下で勉強に勤むようにさせる。このような話には、危険を顧みず我が子を外に出す母親を称賛する口演者小波の母親観が読みとれる。この母親観は、当時の日本のおかれた状況から判断した場合、国是に適うものであつた。

その他『京城日報』によると、七月八日の大邱口演においても「育児法に対する所感」を語っており、七月一日、釜山高等女子学校で開催した最後のお伽講演で話した『石の花』も「母の務めを暗示したる」ものであつた。

一九二三年六月二四日朝鮮に渡つて、六〇回のお伽口演会を開催した小波が朝鮮半島を後にしたのは、七月一四日のことであつた。それから四ヶ月経つた一九二三年一月二五日、『毎日申報』紙上には、「子どもの文芸」欄が新しく設けられる。そして、そこに登場した最初の童話が、まさに、小波の創作童話、『白蛇が出かけた後』であつた。一九二三年一月二五日から『毎日申報』に掲載された小波の童話は、一九二四年三月三〇日まで、およそ一五回にわたつて全一篇が紹介される。口演童話を通して、朝鮮の人々に「聞かせる」活動を行った小波が、今度は『毎日申報』を通して「読ませる」活動に着手したのである。小波が朝鮮側に「読ませた」童話については次稿において詳察する。また『毎日申報』以外の、当時朝鮮に発刊されていた新聞・雑誌に童話が掲載された時期とその経緯について問ひかけたい。これらを切り口として、朝鮮で行つた小波の童話執筆活動が、朝鮮に於ける童話の普及にどの程度影響を及ぼしたのかを検証すると同時に、朝鮮に童話が定着していく過程について論ずることとする。

【注記】

1 巖谷小波『我が五十年』（東亜堂、一九二〇年）、二九五頁。（略は筆者

による)

- 2 巖谷秀雄『童話の聞かせ方』(賢文館、一九三一年)、一九頁。
- 3 巖谷小波、前掲書、三〇七頁。
- 4 内山憲尚『日本口演童話史』(文化書房博文社、一九七二年三月)、一三頁。
- 5 谷出千代子「童話の語りに関する史的考察」『童話の語り発達史』(有限会社海鳥社、一九九三年二月)、一三〇頁。
- 6 巖谷小波、前掲書(『童話の聞かせ方』)、三二頁。
- 7 巖谷小波、前掲書、一〇二頁。
- 8 巖谷小波、前掲書(『童話の聞かせ方』)、八二頁。
- 9 『京城日報』、一九三三年七月二三日付。
- 10 巖谷小波、前掲書、五七頁。
- 11 谷出千代子、前掲書、一七三頁。
- 12 巖谷小波、前掲書(『童話の聞かせ方』)、八二頁。
- 13 『京城日報』、一九三三年六月二八日付。
- 14 『京城日報』、一九三三年六月二九日付。
- 15 『日本児童文学』第一六巻第六号(盛光社、一九七〇年六月)、七三頁。
- 16 小熊英二『日本人の境界』(新曜社、一九九八年七月)参照。
- 17 巖谷小波、「再遊土産朝鮮鮮飴」『文芸倶楽部』(一九三三年一〇月)、一五一頁。
- 18 巖谷小波、前掲書、同頁。

- 19 『京城日報』、一九三三年六月二七日付。
- 20 『京城日報』、一九三三年六月二八日付。
- 21 巖谷小波『桃太郎主義の教育』(東亜堂書房、一九一五年二月)、三二頁。
- 22 巖谷小波、前掲書、六頁。
- 23 巖谷小波、前掲書、二六六頁。
- 24 巖谷小波、前掲書、二七頁。
- 25 伊藤仁太郎『伊藤痴遊全集』第七巻(平凡社、一九二九年八月)
- 26 春畝公追頌『伊藤博文伝』上巻(統正社、一九四四年二月)参照。
- 27 巖谷小波、前掲書、一〇九頁。
- 28 姜在彦『日本による朝鮮支配の四〇年』(朝日新聞社、一九九二年九月)、一七頁参照。
- 29 小波は、朝鮮で『桃太郎』の爺さんと婆さんを実際見ることが出来ることを面白いと述べる一方、朝鮮人みんながこれ程働いているのに国が亡びてしまったことについては、次のように述べる。「これは全く彼地の役人が、腐敗し墮落して居た故だ。即ち上に立つ者が、下の者を虐げて、勝手な事をしたからである。人民がいくらよく働いても、官吏が悪税を取り立てたり、賄賂を貪つたりして居ては、国家はますます衰運に傾く、此の点を考へると、其所には又別の教訓が見出されると、つくづく感じて来た事だ。」巖谷小波、前掲書、四五頁。
- 30 巖谷小波、前掲書、九八頁。

(九州大学大学院博士後期課程二年)